

■ 編集だより

編集後記

新型コロナウイルス感染症は世界を急速にリモート化した。編集委員会は以前から日本中の委員がリモートで参加できるシステムを運用してきたため、スムーズな完全リモート化を実現できたが、ネットワークを通じての会議や講義に慌てた会員も多いことと思う。かく言う私も大学での講義が急遽リモートとなり準備に追われた。講義を担当するようになってまもない頃、先輩から授業はライブだと言われたことが印象深い。それ以来、学生の反応をみながら盛り上がる講義を心がけてきた。しかし、リモート講義では参加者の相互作用を引き出すのは難しく、むしろ映像作品として個々に盛り上がることをめざすべきなのかもしれない。これは多様化の時代には必要な変化にも思える。そんなことを考えつつ、WEBカメラやスタンドライトの向きを調整し、動画編集アプリの設定をしながら、8ミリ映画を撮った昔を思い出していた。

中学生の頃、当時まだ珍しかったコンピュータを扱えたため、友人に誘われてCGを担当したのが、最初の映画製作体験だった。製作期間が足りず、撮影しながら脚本を修正し、最後にタイトルを考えたような作品だったが、文化祭の上映では多くの観客が集まった。高校では卒業前の文化祭でクラスごとに映画を作る伝統があった。公立でしかも文理合同のクラス編成だったため、多様な才能や特技を持った人たちがそれぞれのクラスに集まっていたことがこの伝統を支えていたのだと思う。しかも2、3年でのクラス替えがなく、互いの性格が知れていたため役割が決まりやすかった。自然と監督、助監督が決まり、脚本ができあがり、出演するキャストも決まっていた。クラスが盛り上がる一方で、自分がどんな役割を担うべきか緊張もした。そんななか、映画作りの経験があるからと撮影を依頼された。CGくらいはやろうと思っていたが、撮影となると夏休みの多くを拘束されてしまう。受験勉強の時間が足りなくなるのが不安だったため、交代要員を配置して夏休みの3分の1だけ参加する条件で引き受けることにした。しかし始まってみると、自分がない間に撮影が進むことが残念に思え、2週間の夏期講習以外、ほとんどの撮影に参加していた。ロケの先発隊で清里高原まで出向き、後続との合流のため駅のベンチで夜を明かしたことや、授業を抜け出し平日の人のいない公園でエンディングの撮影をしたことなど、思い出には事欠かない。特殊効果のためのプログラムを作り多重露出で実写の映像に重ね、クロマキー合成の真似事もした。今ではPCで簡単にできてしまうことも多いが、当時学んだ構図や照明のテクニックがリモート講義でも少しは役立ちそうだ。当時は脚本がありコンテがあり、監督や美術、照明などの担当がいて自分はカメラを回すだけでよかったが、今はすべてを自分でこなす主演までするのだから、ずいぶん進歩したとも言える。

スティーブ・ジョブズのスタンフォード大学の卒業式での有名なスピーチにある「点をつなぐ (connecting the dots)」を思い出した。“connecting dots”は、番号が振られた点を順番につないでいくと一筆書きの絵が浮かび上がる、アメリカ人が子どもの頃から親しんでいる遊びで、冊子になったものが空港の本屋にもよく置いてある。ジョブズは点を人のさまざまな経験に見立て、それがつながっていく様を人生にたとえた。ばらばらの点であるときには無意味に見えても、つながった後には一つひとつの点の重要性を認識できる。

学会誌の編集もまた点をつなぐ作業に思える。論文一つひとつが著者の大切な経験であり、それが会員に共有されることで精神科診療という絵につながっていくのだと思う。論文を投稿してくださる会員の皆様や査読者の先生方に感謝するとともに、編集委員として、点がつながる喜びを届ける一助となれることを願う。